

鼎談「まちづくりでの“五感”の生かし方」

進士 五十八（東京農業大学名誉教授・前学長、早稲田大学大学院客員教授）

桐谷 エリザベス（フリージャーナリスト、NHK アナウンサー）

山下 柚実（作家、五感生活研究所代表）

（進士） 今日山下さんが和服を着てくださっています。衣擦れの音をちょっと出してみてください（笑）。

（山下） 聞こえますか。

（進士） いいですね。

（山下） 実は先月、NHK のラジオに出たときに着物を着て、衣擦れの音を立てたら、次々に視聴者の方からメールやファックスでリアクションが来るのです。その音からどういう質感の布かとか、シャキシャキしていて柔らかかだということを、視聴者の方がよく察知して、話がどんどん膨らんでいくという体験をしました。まだ日本人の五感の力は捨てたものではないと感じています。

（進士） そうですね。山下さんとは今回の審査会でいろいろ議論しました。後ほど、ゆっくりうかがいます。まずは桐谷さん、お仕事などを含めて自己紹介をしながら、感じていることをお話してください。

（桐谷） 桐谷エリザベスと申します。よろしくお願ひします。私はアメリカの東海岸、ボストンの出身ですが、アメリカより日本に住んでいる期間の方が長くなりました。最初は北海道、京都、そして約 29 年前に東京に引っ越しました。最初の 17 年間は、日本の大正時代の長屋に住んでいました。長屋の住まいほど、五感が感じられる生き方はないと思います。きちんと季節を感じられます。冬は寒く、暖かくするには長火鉢や炭を使います。このぬくもりは非常に美しく感じられました。とても寒かったから、しもやけも経験しました。冬には「火の用心」を聞きました。私が住んだところにはお風呂もシャワーもありませんでした。

銭湯に行くと、五感のはっきり感じられます。脱衣所にはいつも生け花があり、絵もあります。人と触れ合い、お風呂の熱さを感じる。そして、春になり雨が降ると、瓦の屋根のパタパタパタという音が非常に美しかった。路地を行くと、魚を焼いている匂い、蚊取り線香や普通のお線香、時々三味線の音、そして、家の中の人たちの声もよく聞こえました。非常に貧乏な生活でしたが、非常に豊かな感じがしました。

ところが、グローバル化のせいかもしれませんが、だんだんこの五感が感じられなくなってきました。あるいは、鈍くなりました。日本独特の季節感が薄くなってきた気がします。日本の伝統文化も危機にさらされていると心配しています。

(進士) 最近、外国の方が、日本の五感や文化、あるいは農村の良さを言うようになってきました。不思議ですね。東西比較や南北比較という比較でものが見えるのは本当ですね。桐谷さんのお話しはとても分かりやすかったですね。

(山下) 今のお話を聞いていて、外国の方のほうが問題をシャープにとらえている面があると感じました。私は本業が物書き業で、最近「五感」というテーマで取材をすることも多く、まちをいろいろ触りながら、嗅ぎながら歩いています。

最近新聞のエッセイの取材で、東京の日本橋周辺を歩いてみました。最初に、何気なく日本橋の欄干に手をやると、ザラザラで、ほこりがこびりついていました。指先で、触覚で気付いたわけです。日本橋がここまで汚れているとは本当に想定していなかったので、驚きました。かつてはそこから富士山が見えてまさに浮世絵にも描かれていた、日本の顔、中心だった日本橋が、無惨な状態になっていることが指先からはっきりと分かりました。

なぜなのかと考えてみたら、多分、ここにたちどまって欄干を触る人がとても少ないことが原因の一つなのだなと思ひあたりました。しょっちゅう人が手を置くなら、こんなに汚れたままになっているはずはない。ではなぜ、ほこりが積もってしまうほど触っていないのか。それは、この空間が心地よくないからだろう。だから、立ち止まる人がいないのだ、と気付きました。では、なぜ心地よくない空間なのか。頭上には首都高があり、空は全く見えません。そして、川面も、美しいのかどうか分かりませんが、うす暗い感じで、うらぶれたというか、心地のよい空間ではなくなっている。ただ通り抜けるだけで、立ち止まる場所ではない。だからほこりがたまっているのではないか。

そもそも川の橋というのはどんどころだったのだらうと思います。大阪の橋の気持ちよさを詠んだ句を、以前、大阪を取材していたときに知りました。江戸の元禄のころ、小西来山という人が、「涼しさに 四ッ橋を四つ 渡りけり」。あまり気持ちいいから思わず橋を四つ渡ってしまったという句を残しています。いかに橋の上の空間が涼しくて気持ちよかったかがそこから伝わってきます。それに比べると、日本橋はとても悲惨な状態です。でも、私たちはそのことを何も気にとめなかったから、現在の姿があるのだらうと思いました。

しかし、実は私が取材をした直後、今の日本橋が架橋 100 年ということで、水で石を洗う専門の高圧洗浄会社がドイツから来て日本橋を全部洗いました。その結果、つい先日行くと、もともとの石の質感がよみがえっていたのです。まったく違う触り心地でした。私たちは暮らしている場所の心地よさをどう気付いていけばいいのか。そのとき、五感はある効な道具になるのではないかと感じました。

(桐谷) 進士先生が先ほど、お寺の鐘の音について話をされました。私が住んでいる谷中には、70軒以上のお寺があり、朝5時と午後5時に鐘が聞こえるのをとても楽しみにしていました。鐘の音は、すごく雰囲気があります。ところが、引っ越してきた人がお坊さんに「うるさいから朝5時に鳴らすのは駄目だ」と言い、そのお寺は鐘を鳴らすことをやめてしまいました。午後5時の鐘の音は結構あちこちから聞こえましたが、今は、すぐ近くの小学校がぴったり5時に、西洋的なボンボンボンという音を流し、「皆さま、近所の子供を見守ってください。安全な近所をつくりましょう」という声が聞こえるだけで、鐘は全然聞けなくなりました。しかし、お寺の鐘の音にはそれぞれの気持ちが入っているから、それを聴くことは大事なことです。

(進士) 5時ごろの音は防災無線ではないでしょうね。

(桐谷) ああいうものはずらすこともできますが、今、世の中のこういうものを決める人たちは、日本的なことには全然興味がないのです。五感を考えていない。でも、人間の基本は五感です。あるいは、五感でした。人工的で、五感が消えてしまったような生活でいいのでしょうか。私たちは年配ですから、若いときに自然といろいろな五感を身に着けましたが、現代の子供たちはこういう環境で育っている。私たちはもったときちんと考え直す必要があります。ものを聞くこと、見ること、まちをきれいに守ることは、今の時代こそ大事なことではないかと思います。

(進士) 本当に教育は大事です。数字や機能的なことだけを教育しているのが現実かもしれませぬ。

(山下) 先ほど先生のお話を聞いていても、時間の経過が風景の中にたくさん積もっているんですね。長い時間の経過や痕跡を楽しむことが、今の日本人は得意ではなくて、目の前にある大きな刺激にばかり反応する。遠くのかすかなものには反応はできないという感じの現代人が多くなってきている気がします。町を歩いていても、強い音や光、激しい色彩などがものすごく強い主張をしている。どんどん刺激を強くしないと受ける方も反応しないから、また強くというように、感じるレベルが高まっているのでしょう。でも、そんな町は歩いていて気持ちいいのだろうか。それぞれの自己主張ばかり強く、統一感も調和も欠けている。これからは強い刺激の積算ではなく、もっと引き算が大切になってくるのではないかと思います。

低い刺激でもかすかなものに気付き、感じ、味わう。遠くの音に気付いたり、土地ゆえの香りに気付いたりすることが、ワクワクしたり喜びになるような空間をつくっていかねばいけぬ気がします。

(進士) フロアも明るくできませんか。本当に良い雰囲気になってきたと思います。鼎談ではなく、会場の皆さんもご一緒に参加してもらえたらいいと思います。

強い刺激にしか反応できないというのは、もう五感が劣化しているのです。例えばこのテーブルも一応木目が印刷してあります。でも、これはプラスチックです。木目の印刷技術は本当に見事です。本当の木より木に見えるぐらいです。このように、技術の高度化が部分的特質だけを強調してしまう。これは視覚だけをコントロールしている。しかし、触ると本物の木ではないのがわかるのです。ツルツルし過ぎる。

(山下) でも、本当の木に触ったことがない子供は、これが木だと思って育っていくわけです。恐いですね。私は、こういう講演をするときに、「見えない袋」といって、中にクルミを入れて、目で見ずに触ってもらいます。ある時、幼稚園児はそれを「ゴルフボール」と答えました。もう一人の子は触っても「全然分からない」と。クルミに触ったことが1回もないのですから、質感なんてわからない。クルミはケーキの中に入っている程度。皮膚を通した経験が失われていく。このテーブルも同じだと思います。

(桐谷) そうです。今は学校でも家族でも、頭の使い方が第一になりました。リアクションはできるけれども、知識や能力が一番大切にされて、機械やインターネット中心の孤独な生活が当たり前になりました。よく考えると、若い人たちは犠牲者です。長屋生活では寒さなどで大変なこともありましたが、素晴らしいと思うこともありました。例えば暖かくない家でこたつに入ってお茶を飲むと、冷たい手に伝わってくるお茶わんの温かさだけで、とても素晴らしいと感じられるのです。

(山下) アメリカの子供たちはどういう感じですか。

(桐谷) 私が生まれたときは、大体の家はセントラルヒーティングで暖かかったです。でも、遊ぶ場所は冬でも外でした。そして、寝るときは湯たんぽを使いました。私が今住んでいる家は長屋ではないですが、新しいものではなく、50年前のものです。寒くて、毎晩湯たんぽを6つベッドに入れて寝ています。気持ちいいです。

(進士) やりすぎではないですか(笑)。

(桐谷) だから、入ると「あー」と。こんなシンプルな楽しさは、今の社会では本当に感じにくくなりました。今、幸せや良いものの基準が高くなりすぎたのです。貧乏な国の方が、五感の良さやそれを感じる遊びがよくできます。

(山下) 今、日本の中で、「体験」という名前が付いたイベントや旅に人気が集まり始め

ています。農業体験や体験学習、伝統工芸の体験とか、工場見学ツアーも人気です。知識だけではなく、自分の体を通してもう 1 回感じよう、体感を通して理解しよう、その方がワクワクして面白いと反応する人も増えてきています。それが可能性ではないかな、と思います。いくら今の環境を変えて暖房を切って寒くしなさいと言っても、なかなか広がっていかないとすれば、五感を使うことは楽しい、と知ること、その中から、やはり寒さを感じるのも面白いとか、電気を消して暗い夜に月を見るのもすてきだという感性が、また新しい形で発見し、広がっていく。そんな方向の取り組みがたくさん出てくるといいと思います。

(桐谷) そうですね。欧米人向けのいろいろなプランがあります。私はある町へ行って和菓子作りの体験で、5 代目のおじいさんに教えてもらいました。私はそれ以前にお茶もやっていたので、和菓子が好きだったのです。しかし、自分で作ってみると本当に難しい。私は何倍も和菓子が好きになりました。和菓子には、いつも季節が入っています。こういう体験は、欧米人向けの観光としてとても人気があります。

また、有名な建物などを見るより、そこに住んでいる人たちの生活を見る。例えば東京に住んでいる日本人でも、地方の小さい町へ行って、観光ではなくただぶらぶら歩く。喫茶店でも、赤提灯でも、銭湯でもいいですから、地元の人たちと話して、その人たちの生き方を見ることは非常に刺激になります。

(山下) 今回、環境大臣賞を受賞した「飛騨里山サイクリング」は、今おっしゃったような何気ない里山の暮らしを巡っていくツアーだそうです。

(進士) せっかくですから「美ら地球」の方、ここでアピールしてみたいかがですか。

(白石) 株式会社美ら地球の白石と申します。私たちは「飛騨里山サイクリング」という事業をやっています。詳しくは後ほど御説明させていただきますが、私たちは何気ない生活が広がっている里山にお客さまをお連れするといったサイクリングのガイドツアーを行っています。

私たちは、日本人の方も外国人の方もターゲットとして PR していますが、良い反応を示されるのは欧米の方々です。外国人で個人旅行で日本に来られている方、中でも日本が大好きで、もう 3～4 回は来たことがあるという方は、やはり東京・京都・大阪といった所も非常に魅力はありますが、日本人が一体どういう生活をしているのか、昔から受け継がれてきた文化が何なのかということに興味があることが多いです。

(進士) 観光立国というと、やはり有名なお寺や神社という印象が強いですが、日本の実体、本当の姿を体験する。外国人の方が感度が良さそうだとということが分かりました。

ただ、外国の人だけに味わってもらったのでは困ります。今、日本の子供たちやここに
いる大人たちはどうしたらいいでしょう。

(桐谷) みんなが地方へ行って、ゲームを捨てて、テレビも見ないということはできな
いので、非常に問題だと思います。今、機械やインターネットが普及し、人と人が個人的
に話すことは少なくなりました。だから、普通の学校で例えば週に 1 回、クラス一緒に地
元の銭湯に行き、銭湯の経験をしてはどうかと思います。銭湯の湯は熱かったりぬるかっ
たり、またいろいろな薬湯の香りがあったりします。そして、自分だけこっそりでなく、
人と一緒に入るということをやってほしい。そのように、日本のすてきな文化を試すこと
が大切です。

今年のお正月にお節料理を食べたかどうか近所の人たちに尋ねたのですが、20 年前は自
分ですべて作ったそうです。10 年前には、ほとんどの人は食べたけれども、デパートで買
ったそうです。そして今年も、誰も作ることも食べることもしなかった。なぜなら、お孫
さんがお節料理をあまり好きでないからです。お孫さんはハンバーガーの方を欲しが
るそうです。

そういうことをしていると、習慣・文化は完全に壊れます。例えばアメリカ人は、感謝
祭でターキーとたくさんの野菜を食べます。私は若いとき、これが大嫌いでした。選択の
余地はなくて、それを食べる日だから無理に食べていたのです。でも、だんだん年を取
ると、そういうものに逆に懐かしさを感じて、特別な日になります。現代の日本で、お正月
でも買い物をして普通の食べ物を食べているのは、私の目から見ると悲劇的です。こんな
若い人たちばかりでは、日本の和食も、大事なものもなくなってしまおうでしょう。

(山下) 大きな流れとして、便利なものを使おうというのがあるのではないでしょう
か。お節料理はたくさんデパートでも買えるようになると、「作るのをやめよう」となりが
ちだと思えます。どんどん簡単な方へと流れていく。

(桐谷) それでも、食べればいいのです。食べなくなることが恐ろしい。

(進士) 面白くなってきましたね。フロアの皆さん、今年の正月、お節料理とお雑煮と、
どちらか食べた人はいますか。

(フロアのお客様、挙手)

(山下) 結構多いですね。

(進士) よかった。ここは特別かな。五感に敏感な方々が集まっておられますからね。

(山下) 私は年中行事なども取材していますが、日本にしかない文脈で季節感を楽しむイベントに関心が高まっていることも感じています。例えば、江戸川区では中秋の名月のとき、電気を消して月を見ようと自治体が呼び掛けたというニュースが去年もありました。ただ、憂うべきは、ある調査の結果、「中秋の名月」という言葉を知らないという 20 代が 20%いたということです。ですから、伝えようという意識や、暮らしの中でそういうものを使うことは楽しい、五感を使うのは楽しいということを、親や、そういう楽しさを知っている人が一緒に体験を通して伝えていく努力が必要だと思います。そういうものが大切だという本能的な危機感や意識は、むしろ高まってきているのではないかという気がします。経済性や合理性だけでつき進んできたものについて、それでよいかのをもう一度問い返そうという時代に入っているのかなと感じています。

(桐谷) 私が初めて日本へ来て、日本人を見たときに思ったのは、季節感が繊細なことです。例えば、季節によって飾る絵を替えたり、決まった日に夏と冬の服を替えたり、着物はどんな模様が正しいか、和食を食べるときの器はどんなものがいいか。例えばサクラの模様は秋には使わないとか、そういうことに昔から日本人は厳しかったのです。俳句を詠むときには季語があります。でも、若い日本人は、季語を見ても季節が分からないのではないのでしょうか。私は今、イチゴを食べています。イチゴは本当は夏のものです。学校でしっかり季節のものを教えることは大きな課題だと思います。

(進士) 日本の四季は本当に食材も豊かですから、季節ごとに食べ物が違います。しかし、日本の農業技術があまりにも高度になってしまったのかもしれない。消費者が求めるということもありますが、悪いのはマーケット第一主義ですね。ショートケーキにはいつでもイチゴが載っているでしょう。冬にイチゴなんておかしいですね。でも、みんなハウスで作っているわけです。あれは灯油を燃やしているのでしょうかね。

(桐谷) 経済に良いものは、人間の心に悪い。

(山下) 多分、社会自体が産業的に走りすぎている面は非常に危機感を持っていないといけないと思います。

今回、京都・水尾の柚子の里がカオリスタ賞を取られましたが、例えば、京都の冬には柚子の香りがする里があります。そういうところを訪ねていけば、完全に香りと季節とか、その場所らしい風土とか、その場所にしかない石垣の風景があります。私は名前が柚実、柚子の実と書きますから訪ねていきました。そうすると、柚子風呂に入れてくださったり、柚子ポン酢で食べる鳥鍋があったりと、まさに五感全体で季節、冬の柚子の香りを堪能する体験もできるわけです。だから、片方では非常に危機的な状況があることを自覚しながら、でも個人としてはなるべくそういう場所を見つけたり、いろいろ自分の感覚を

豊かにしながら楽しいこととつなげて、五感の体験を増やしていく。そういう方向に行ったらいいのではないかと思います。

(進士) こういうのはもっとアピールをしたいですね。柚子の里や藤枝の茶園にもぜひ行ってほしいですね。

(桐谷) 東京のお風呂にも柚子の湯があります。柚子湯の日は特別な日で、柚子というイメージが全く変わってきます。だから、柚子湯の季節になったら、例えば全国のお風呂で何かイベントをして、もっとPRする。

(山下) 銭湯は菖蒲湯と柚子湯はかなりやっているといますよ。

(進士) 東京にはまだ、銭湯が結構あるでしょ。

(桐谷) 800軒近く。でも、どんどん減っています。私は銭湯の委員会に入っているのです。多分、皆さんより銭湯に入った経験があると思います。約20年間、自分の家にお風呂がなく銭湯に行っていたので、銭湯の様子はよく分かります。まちづくりでも東京の最大の観光資源となるのが、現代の銭湯です。海外の人たちは、どうして日本人はお風呂に長く入るのか分からないと言います。日本のお風呂文化を理解できません。日本人は意識しないと思いますが、日本のお風呂文化は非常に独特で、非常に面白いです。それを、海外やほかの人たちに宣伝することが必要です。現代はスパの時代になりましたが、今の銭湯の制度には、恐らく世界で一番古いお風呂の文化がまだ生きている。どうしてもっと銭湯をアピールしないのでしょうか。

(進士) 今の日本の子供たちはほとんど家風呂ですから、銭湯そのものを知らなくなっているかもしれません。逆に、下宿生とか、外国から留学した人は銭湯へ行っている。お風呂というのは温熱感覚で皮膚から温まって、柚の良い香りですっきりくるわけでしょう。そこに香りがあると、本当に良いですね。昔は、湯口は大体、富士山の溶岩で積んでありました。滝みたいに落としたり、富士山と湖水が描かれていたりしました。そしてあがったら冷たいコーヒー牛乳を飲む。

(山下) 私も若い時、銭湯通いをした経験があります。銭湯はまさにご町内の交流センター。それと、五感体験とが一緒になった、すごい体感サロンですね。こういうことは、やはり外国の方のほうがよく問題を把握されていらっしゃると思います。

(進士) 今度は銭湯カフェというのはどうですかね。

(山下) 今、吉祥寺に風呂ロックというのがあります。すごい人気なのです。その中でライブをやって、風呂屋をやっているという。長蛇の列ができて、話題になっていますよ。

(桐谷) 谷中の銭湯も、尺八のコンサートをやったり、朝は老人のケアに利用したりしています。

(進士) いよいよ、銭湯シンポジウムになってしまいそうですね (笑)。

(桐谷) すみません。でも、銭湯は五感が同時に感じられる完ぺきな場所だと思うのです。

(山下) ところで、賞の選考のことを少しお話しますと、非常に時間をかけて議論しました。意見がたくさん出て、なかなか一つに絞りきれない、喜びとつらさがありました。47 件の応募があったのですが、タイトルも、中身も、本当に多彩な取り組みが集まっていて、一言では傾向が言えない、という多様性の良さがあったと思います。

五感という窓口、テーマはいろいろなまちづくりに関連しています。そこから読み込むと、また自分たちのやっている取り組みが新しくブラッシュアップされたり、足りないところなどが見えてきたり、いろいろな再発見があったりする。47 件を眺めていて、そういう道具として「五感」というテーマを使うといいのかなという気がしました。非常に多彩でしたが、コンテストだから選ばなければいけません。しかし、本当は優劣をつけるのはあまり意味がない。五感のテーマというのは、本当にそれぞれの固有の世界があって、どれが上か下という優劣とはそぐわない。このコンテストの役割も、優劣をつけるというよりは、よい参照対象を見つけてもらう、モデルを提示する、ということかなと思います。

(進士) エリザベスさん、フロアに入賞写真が展示されていますが、ご覧になった感想はありますか。日本の五感風景の面白いものが結構選ばれています。

(桐谷) とてもきれいな風景がいっぱいありました。葉っぱが手に載っている写真は、秋の香りと同時に音も聞こえてくるようでした。そして各写真がそれぞれの深い雰囲気伝えていました。

(進士) 写真の中に 3 枚組写真があります。今、エリザベスさんが言われたのは、「落ち葉屋さん」という作品で、東京でしたね。

(桐谷) 日本人と落ち葉の関係が面白いです。写真を見て、いろいろな感動がありました。普通、日本人は落ち葉をあまり大事にしません。すぐ片付けます。近所で毎朝落ち葉

を片付けているのを見ると、アメリカを思い出すのです。私の両親の家には、裏に小さいガーデンがあり、秋に訪ねたとき、そこに落ち葉がたくさん落ちていました。主人は日本人ですから、ある朝起きて全部片付けてしまったのです。彼はものすごく良い気持ちでしたが、父はそれを見てがっかりしました。私たちにとって、あれは秋の風景なのです。日本人はすぐに片付けてしまいますが、葉っぱには本当に大事なセンスがあります。

(進士) 武蔵野の雑木林は落ち葉の文化です。それが堆肥になり、お芋になっていく、そういう命のもとにもなっています。エリザベスさんが言うように、日本の都市はアスファルト舗装で蔽われてしまっただけから、落ち葉を全部ゴミにしてしまいました。落ち葉炊きも、焼き芋もなくなってしまった。

(桐谷) 随分前には、焼き芋を売っているのは東北の人たちでしたが、「焼き芋～芋、芋」と、声で誰かと分かりました。日本の場合、声を面白く使います。例えば店に入ると、「いらっしやい、いらっしやい」と言います。外国にはないのです。

(山下) おそば屋さんは、「いらっしやいー」と長く伸ばします。そばが長いのも同じ感じを音から出すのです。

虫の音を聞くというのは、西洋の人は全然しないと聞きましたが、どうですか。

(進士) 雑音、騒音に聞こえるらしい。

(桐谷) 私が日本で一番雑音だと思うのが、スピーカーです。自然な人間の声や、ネコの声、イヌの声などがいいなと思います。

(進士) テープは駄目ですが、人間の声ならいいですね。お寺の鐘まで、今は機械の音のところもあります。

(山下) お寺の鐘を突く体験ができるところもありますが、そのような体験を通して、いろいろなことはまだまだ取り戻せる部分もあると思います。

(桐谷) 今、近所では、豆腐を売るとき、レトロな特別な笛の音でやっています。

(進士) あれは笛でなくラッパではないの？

(山下) ラッパです。

(桐谷) 谷中ではそれを現代の会社がやっています。こういう伝統的なものをもう一度はやらせたらいいと思います。

(山下) 今、一つだけの強い刺激でがんがん押す商品が世の中に満ちあふれていますが、そういう発想ではなくて、五感の刺激はかすかでも多彩にあって、それをじっくりと楽しめるものがほしい。楽しめば楽しむほど自分なりに発見がある、というような商品を追求して行ってほしい。五感を使って楽しめる、長くつきあい続けることができる商品が、評価されていく時代が来ると信じています。まちづくりも同じではないでしょうか。

(進士) エリザベスさん、日本の企業や会社の方、行政の方々に何か提案を。

(桐谷) アメリカで同じ質問をされたら、同じことを答えますが、私の提案は「レトロ」です。昔あった、本当の国の文化をもう一度復活させる。全部ではないですが、豆腐を売るときにラップの音でやるとか、柚子の湯を増やしてもいい。10年ほど前、誰も浴衣を着なくなり、近所でも盆踊りはみんなジーンズやスニーカーでがっかりしました。しかし、最近、特に若い男女がペアで浴衣を着ています。このように、日本の伝統的な文化を違う角度から見るととてもモダンで、またはやったらいいと思います。

風呂敷は天才的な考えです。きれいな模様ですし、小さくたたんでハンドバッグに入れておけば、買い物をするときに使えます。ビニール袋も使わなくていい。昔は買い物をした後、風呂敷で美しく包んでいるからきれいでしたが、現代は、きれいな女性が買い物の帰りにビニール袋を下げている。日本はもっと美的に、エコの政策としても風呂敷を世界中にアピールしたらいいのではないのでしょうか。2016年のオリンピックを東京に誘致するため、日本橋を何とかすると言いましたが、そうした古い建造物の保存と同時に、風呂敷のような、日本人の中で当たり前のものをもう一度大切にしてほしいと思います。

(進士) 日本橋の人たちも、日本の文化を前面に出した方が、かえってグローバルな都市間競争にも伍していけると思うようになってきました。でも大勢はまだまだ日本の文化を評価しないで、グローバリズム路線が多い。

(桐谷) そうですね。でも、世の中の面白さはグローバルではないことです。

(進士) ボストンはアメリカの都市の中でも、アメリカの文化や歴史を大切にしている街ですね。

(桐谷) ボストンは保守的な街です。中心部にある家は200年～350年前に建てられた建物ですが、外観に厳しい規制があって、何も変えることができません。修理が必要なとき

は、建設当時の外観が変わらないようにたくさんの費用をかけて修理します。

1950年、街の真ん中に高層ビルを建てるという計画がありました。それについていろいろな議論があり、選挙をしたところ約51%の人が反対でした。多くの人々が建て替えを望んでいたのですが、アメリカの民主主義では、51%が賛成だったら、ほかの49%は仕方がないということになるのです。それで街並みが保存されてから、その土地の値段は50倍になりました。しかし、家の外観はそのままです。家の中を改築するのは自由ですが、外観を変えることはできないので、気に入らなければ家を売って、地方に引っ越さなければなりません。しかし、あの地域に家を持つことは非常にステータスシンボルになるのです。数が限られているからです。

このように、日本の中でも、風景を守るために建物にも厳しい規制を作らなければいけません。日本の美しいところに、風景にそぐわないものもあります。富士山の美しい景色の前に自動販売機があります。もっと違う形にしたらいいと思います。

(進士) そうですね。日本でも少しずついい方向へ進んでいます。こういうイベントで啓発されて、大勢がそう思ってくれるようになればいい。

(桐谷) ほとんどの人のコンセンサスがないといけません。谷中の場合には、古い家を建て替えるのは仕方ないけれど、そのときは建て替える前の建物と同じ色にしましょうと提案しましたが、実現はしませんでした。

(山下) 進士先生に一つだけ質問をしていいですか。土木工事によって西湖十景ができたというお話をされましたが、ああいうことが日本で起こってくる可能性はあるのか、どうしたら土木工事が、人々からアイされる「十景」になっていけるのか。

(進士) 要するに、総合行政に転換できればいい。それから、たとえ行政が縦割りでも、一人ひとりのエンジニア、技術者、あるいは政策を策定する責任者が、トータルな感覚を持ってやればできるわけです。歴史も自然も文化も一緒に守るように考える。ところが今の日本では、自然を担当する人は自然しか考えない。歴史をやっている人も歴史・文化を考えない。みんな分かれています、しかもそこしか価値観を置いていない。本当は、人間が全部バランスよく、どこにいてもすべてをトータルで考えるようになればいいわけです。この五感も、本当は五つではまだ足りません。全感なのです。「全」という字はトータルという意味です。そういう全部を見る目をみんなが持てばいいと僕は思っています。

元気というと大体、経済です。一般的には、活力、活性、地域の活性化という言い方でやります。これは、日本全体が少し沈んでいるからです。これは大事だと私は思います。ただ、その活性化の方法が、山下さんが言われたように、単一の要素だけをがんがんやってもいけない。それはある時期は伸びるし、1年か1年半はその商品が売れるでしょ

う。サステナビリティ、持続可能性は、一瞬で勝負ではない。活力の後ろには魅力という言葉があります。魅力は、私はアメニティと訳してもいいと思っています。本当は魅力と活力はセットだと思います。

美しい風景とよく言いますが、「美しい」という字は、上に「羊」と書いて、下は「大きい」と書きます。今までは、美しいことは行政がやることではない、芸術家がやればいいと思ってきました。しかし美しいが大きな羊で、大きな羊は役に立つということで、有用性と美しさは裏表、両方必要だとすると、正に必然性の美とか、機能美で、公共が最も中心的に取り組むべきテーマということになります。

いろいろなものを感じて、あるものをトータルに受け止めて、バランスを取って全体で考えていく。食べることや仕事をする必要も必要です。「衣食住」という言葉もありますが、本当は「生活」なのです。「生産」という言葉に対して「生活」という言葉があります。われわれは20世紀にもものを生産することばかり考えてきました。今、あるものを大事に生かす時代に徐々に入ってきたのだと思います。そのときに、五つの感じ方でその資源の良さを味わい取り、生かしていく。

アメリカもボストンだけではなく、ニューヨークなど全然違う街がいっぱいあって、多様なのです。みんな違うやり方で、でも最終的にはトータルな環境や暮らしの在り方、生き方を大事にしてほしいと思います。皆さんの生き方をつくってほしいと思います。人のまねをすることはしないと思います。自分のやり方で、一番強く感じたところから、結局、自分らしい生き方をすればいいわけです。そのとき、この五感で感じる方法は誰もが持っている、そして極めて重要な武器だと思います。

お二人とも、またフロアの皆さん、どうもありがとうございました。